

# 賀茂保憲女集序文の語彙と築島裕説

関 一 雄

## 一 はじめに

平安時代の仮名文の語彙がどのような性格のものであったかについては、多くの研究者によって様々な説が提出されており、今後も新しい観点からのアプローチが期待されるところである。

筆者は、『竹取物語』や『うつほ物語』（藤原の君巻）などの昔物語では、語り（地の文）と会話文（登場人物のセリフ）とではかなりの相違があることを指摘した。<sup>【注1】</sup> いわゆる漢文訓読語（訓点語とも。以下「いわゆる」を冠せずに使う）の多くは、会話文の、それも身分の高くない人物のセリフに用いられることによって、その人物が物語中の脇役または端役であることを示唆する重要な標識となっているケースがある。このことは、物語の主役は誰であるかを間接的に示唆することにもなる。これは物語作者によって、読者（聴者）のために、考案されたすぐれた用語選択（言葉選び）の技法であり、その分かりやすさ・面白さによって、

読者（聴者）に愛読され、書写に書写が重ねられ、あるいは版本によって流布して千年余の今日までに伝えられたといっても過言ではなからう。更には、そのセリフに用いられた漢文訓読語は、当時の日常的用語であり、それを身分の高くない人物に用いさせ、一方、身分の高い登場人物のセリフと物語の語りを、いわゆる和文語で共通させることによって、物語の語り手が、貴族の一人として物語世界に関わっており、時には物語の現場に登場してコメントする（草子地）ことも可能にしたのであろう。

さて、本稿は物語ではなく、賀茂保憲女が書いたとされる家集の序文を取り上げ、そこに用いられている漢文訓読語と、同時に用いられた「音便形」について、築島裕説と関わらせて、私見を提示し、日本語史研究者の叱正を賜りたい。

【注1】 『平安物語の動画的表現と役柄語』二〇〇九年の第一部の第一章・第二章

【注2】 日常的用語とは、表現者が言語表現を行うにあたって、

意図的な用語選択の意識の極めて弱い状況下で使われた語と規定する。平安時代の貴族が文学作品（和歌・散文等）にふさわしい語を選択するに際して、和歌や物語の語り（地の文）に使う語は、意図的な用語選択の意識の強いものであったであろう。その中で昔物語において身分の高くない登場人物のセリフに、日常的な会話や読み書きに用いていた語を使わせた、という点では、用語選択の意識が働いていたことは確かだが、その役柄を際立たせるために、語りの用語とは区別する物語作者の表現技法であった、と考えたい。

## 二 賀茂保憲女集序〔総序の冒頭〕

しきしまの世中、わがみかどの御しぞく、くにのうちのつかさ、ちぢのかどすぎにしとしごろ、ならへる月日のなかにもとむれど、我が身のごとかなしきひとはなかりけり、としのつもるままに物おもひしげりけるときに、おもひけるやう、はかないとりといへど、むまるるよりかひあるは、すだつことひさしからず、はかないむしといへど、ときにつけてこゑをとなへ身をかへぬなし、かかれば、とりむしにおとり、木におよぶべからず、くさにだにひとしからず、いはんやひとにはならばず、◆いちはやぶる神代より、ひとをばかしこきものにしけるぞ、そらをとぶとりといへども、みづにあそぶいとといへども、はりをまうけ、いとをすげて、そのまな

こをとちて、ふかきうみといへど、きをくぼめ、かちをまうけて、おのづからわたりぬ、すべてかぞへば、はまのまさごもつきぬべう、たごのうらなみもかずしりぬべうなむ◆、をとこをんな、さまにしたがひ、あけの衣としごとにいるまさり、つたなきまつにすむたづは、みのころもとしふれどいろをかへず、のぞみはふかけれど、たにのそこに身をしづむることをなげき、あるは世をそむき、のりにおもむいてころをふかき山にいられて、みのをかけていしのたみに身をかけて、こけのころも、きのはをつきにして、まつのはをくふ、これはよはひをたもつとききたり、……『新編国歌大観』による。以下同じ）

◆の間の本文について、『和歌文学大系 賀茂保憲女集』〈二〇〇年〉の脚注（武田早苗）では、周易・繫辞下伝の一節を引き、「鳥、魚などをすべて征服して、自然界で絶対的優位に立つ人間の賢さを述べる。」と解説し、「まなこをとじて」について、「「まなこ」は漢文訓読調の語。人間が鳥も魚も殺してしまふことを意味する。」と注する。「まなこをとじて」は、『周易』の当該引用部分には無く、直接その訓読からきたことはこの注では論証されていないが、二重傍線部「べからず」「いはんや」など、漢文訓読語がその直前に用いられており、序文の書き出しが漢籍の訓読に影響されている、という主旨の注と思われる。しか

し、その直前と当該部分に一重傍線を付した音便形も少なくないのは何故であろうか。ここでは、このことを重視して、後述の築島説との関わりを考える。

### 三 序文の終わり〔病中吟の序〕

此歌は、あめのみかどの御時に、もがさといふものおこりて、やみけるなかに、かもうちなるをんな、よろづのひとにおとれりけり、さるなかに、ただもがさをなむすぐれてやみける、かきのみにもあらず、おほくのやまひをぞしけると、からうじてこの歌よりなんよみがへりける、そのほど冬のはじめ秋のをはりなりければ、くさきもかせも、やうやうかれもていく、つれづれなるままに、めづらしきやまひなりとて、このかさのそやみをかきおければ、やまひさるることによくなむ、見んひと、ゆゆしくおもひぬべしとて、いささかいろにもいささず、ただこころひとつにおもひて、わが身のはかなきこと、よの中のつねないこと、ながむるゆふべ、そらにたまとるむしをよみ、あるときは、あまたのたましひをかたりきて、うたあはせをして、かちまはこころひとつにさだめなどしてぞ、なぐさめてあかしくらしける、見るひとは、さもこそやまひたかしそらめ、つねにによびびとなむ、これをこのむかはなどいへど、ききいれず、わづかにすすき、きくなどうゑてみんとしけるを、このやまひにつきて、

しらぬほどに、きくもかれにけり、ま〜してかかることせばおもひこめてややみなんや、よろしからむとさだむるに、なほあかねば、かかるとをいかなるひとしけん、心もなかりけるひとかなといはば、おほよそのひとのなたてなげれば、あかせるなり、だいましらすひととなし、ただよまるときおもしろきにすれば、冬も、さくらこころのうちにのみだる、なつの日にも、心のうちにはゆきかきくらしふりて、きえまがひなどすれば、さだまることなくて、かきあつむるてもさだめたらず、はしにかくべきことをおおくにかき、おくにかくべきことははしにかき、さだまることなし、もがさのさかりに、めくをさへやみければ、まくらかみに、おもしろきもみぢを、ひとのおいたりければ、おもひあまりて

— くもりつつなみだしぐるわがめにもなほもみぢはあかくみえけり

〔執筆契機の序〕とも称されるこの部分には、漢文訓読語は用いられず、それと対立的な「いはんや」に対し波線部「まして」「まなこ」に対し波線部「め」などのいわゆる和文語が用いられている。係助詞「なむ(なん)」が複数回用いられ、音便形も用いられるが〔総序〕ほどには多くない。これは、何を意味するのであろうか。

次に引用する総序の終わり近くに用いられた「かしらかたぶ

け」が、当時の仮名文の用語を考える上で、重要な示唆を与えて  
 かれている。

#### 四 総序の終わり（「序文」全体では始めの部分）

めづらしきことのはをいひいでたれど、たれかかしらをかた  
 ぶけ、ふかきあぢはひをもしらむ、よになきたまをみがけり  
 といふとも、たれかてのうらにいでて、ひかりをあはれびむ  
 とおもへど、でいのなかにおふるを、はるかにそのはちすい  
 やしからず、たにのそこにほふからにそのはちすいやしか  
 らず、宮の内の花といへども、さく事は隔なし、……

傍線部分の「かしらをかたぶけ」は旧著『平安時代和文語の研  
 究』（一九九三年）の第三部第一章で指摘した通り、女流文学作  
 品では、極めて珍しい言い方である。このような動作を表す言  
 方を、次に『枕草子』と『源氏物語』から、一例ずつ挙例する。

かしらはあまそぎなるちごの、目に髪のおほへるをかきはや  
 らで、うちかたぶきて、物など見たるも、うつくし。

（枕草子・うつくしきもの）

の傍線部の「かたぶきて」は、「首ヲカシゲテ（何カヲ見テイ  
 ル）」という動作を表している。

衛門の督を、かゝる事の折も、まじらせざらんは、いとほ  
 えなく、さうぐしかるべきうちにも、人あやしと、かたぶき

ぬべき事なれば、まのり給ふべきよしありけるを、

（源氏物語・若菜下）

の傍線部の、「あやしと、かたぶき」は、「変ヲト、首ヲカシゲ」  
 という動作を表している。

一方、男性の書いたとおぼしき文章には次のような言い方があ  
 る。

例、忠房舌を巻きかうべを垂れて、やゝ久しくありて「言の  
 理当るところ、宜しくして然るべし」とて、「さらにその理  
 をせよ」とて、右方負になりぬ。

（延喜二十一年〔五月〕京極御息所襲子歌合）

「かうべ」は、体の一部分である頭部を表し、二重傍線部のよう  
 な表現で、「頭ヲ下ゲル」動作を表している。なお、その直前の  
 「舌」も体の一部分である。女流文学では、体の部分をあからさ  
 まに言うことは、避けられ、前掲のような表現が選ばれたのであ  
 る。ちなみに、

（源氏↓小君）「あこは、知らじな。その伊豫の翁よりは、さ  
 きに見し人ぞ。

されど、「たのもしげなく、頸細し」とて、ふつゝかなるう  
 しろみまうけて、かく、あなづり給なめり。（略）」

（源氏物語・帚木）

の「頸細し」の「頸」は「頸部」を表したのではなく、「頸細  
 し」という言い方で、空蟬の夫である伊豫介が、太って（ふ

つゝか) 恰幅がいいのに対して、自分(源氏)は、「瘦セテイテ、心モトナイ」という意味を表しているのである。

このように見てくると、保憲女集の「たれかかしらをかたづけ」は、『枕草子』『源氏物語』のような、女流文学の表現が定着する以前の、素朴な(日常用語的)言い方と考えられそうである。

三箇所に分けて引用した保憲女集の序文について、国文学者のコメントのごく一部分を紹介すると、「奇妙な序文」(三田村雅子)、「この期の私家集の序文としては変わり種」(守屋省吾)、「内容が混沌としている」(武田早苗)など、表現はことなるが、難解な文章であることを言っているとしてよからう。

本稿は一はじめにで提示した「仮名文に用いられた漢文訓読語」と「音便形」について、築島説とを、関わらせ私見を提案する。

【注3】「賀茂保憲女集の位相―(鳥)の表象・歌から序へ―」

(『和歌文学新論』(一九八二年)所収)

【注4】「蜻蛉日記形成論」(一九七五年)

【注5】「賀茂保憲女集 解説」『和歌文学大系20』(二〇〇〇年)

所収

## 五 筆者がこれまでに抱いてきた築島裕説への 疑義・問題点

築島氏の説は、今日の言わば通説となっている。

しかし、この説に対して、筆者がかねてから基本的に疑義を抱いてきた箇所を次に引用する。

訓点の原となつた漢文そのものでなく、表現対象は一往同じであるが、表現者の表現態度の相違によつて、語形が二つに分れる場合である。シム(訓点)とス・サス(仮名文字)、ゴトシ(訓点)とヤウナリ(仮名文字)などは、その典型的な例であつて、既に周知の事実であるが、このやうな二形対立は、これ以外にもその例が極めて多いことが、上述の結果から導き出されるのである。これは、助動詞や助詞ばかりでなく、副詞・形容詞・動詞から、更に名詞の類にまで及ぶやうである。次にその一部の例を掲げる。(『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(一九六三年)(三五〇頁)(傍線は筆者、以下同じ)

傍線部の「表現対象は一往同じ」という説明と、「表現者の表現態度の相違」というところに、問題点があるのであるが、このあたりは同氏の後の著書では次のように、書き換えられている。

漢文訓読語と和文語とは、平安時代の文体の世界に於て、最も極端な両端に位したと見られるのであつて、その言語現象上の相違は、(中略) 語彙の面に於ても著しいのである。(中略) 和語だけに限つて見ても、注意すべき事実が存する。それは、略、同じ意味を表す語が、漢文訓読語と和文語との間に、対立的に見出されるといふことである。

(『平安時代語新論』(一九六九年) (五八二頁))

前著の「表現者の表現態度の相違」という部分が無く、「表現対象は一往同じ」が、「略、同じ意味を表す語」と書き換えられている。この二つの説明に共通して問題なのは「一往」「略」という文言である。これが、更に後に書かれた同氏の著書では「同じ意味を表すのに、異なつた語形を用いる例が多い」(『平安時代の国語』(一九八七年) (二七二頁))、というふうになつて「一往」「略、」の語が削除されてしまつていたのである。

筆者はここに重要な視点が欠落してしまつたと考える。すなわち、「一往」「略、」の冠された前二著では、「同じに近い」という意味合いが含まれているが、これが削除された一九八七年のものでは、全くの同義語とされてしまつていたのである。一体、訓点資料・和文資料という全く異なる資料に並行的に使用される両者を比べて、同じ意味か、ほぼ同義であるとされる根拠はどこにあるのであろうか。同じ資料の中の相似した文脈のなかで対比して

こそ、如上のような判断が下されてしかるべきである。

また、築島説に対する次なる疑義は、一九六三年の著書を初めとして後述の著書にも挙げられた「二形対立」のもののうち、「慈恩伝古点」にも「平仮名(仮名文学作品のもの)」のものが四割強も見出されることである。次の諸例がそれである。

(名詞の例)

トモガラーひとびと。ヲフトーをとこ。カウ  
ベーかしら。マナコー目。

(動詞の例)

イコフーやすむ。イソフーきほふ。イヌ(寝)  
ーぬ。ウム(倦)ーあく。オソルーおづ。オヨ  
ブーいたる。キソフーきほふ。キハムーいたる  
(?)。コゾルーかぎる(?)。コヒネガフーね  
がふ。サイギルーへだつ・さふ。サク(裂)ー  
やる。サククーたまふ。ソナフーまうく。タタ  
フーほむ。ツラナルーならぶ。フケルーすさぶ  
(?)。ホドコスーたまふ(?)。

(形容詞の例)

イサギヨシーうるはし。モシーしげし。

(形容動詞語幹の例)

スコシキーすこし・わづか。スミヤ

カーはやし・とし。

(情態副詞の例)

アラカジメーかねて。コトゴトクーすべて。

ツトニーはやく。ママーときどき。ミダリニ  
みだりがはしく。モシクハーもしは。ヨリヨ  
リーーときどき。

(程度副詞の例) マスマスーいよいよ。

(陳述副詞の例) イハムヤーまさに。

【築島裕】<sup>興福寺本</sup>大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究 索引篇(一九六六年)による点検】

これらのうちには、「慈恩伝古点」の中でも同義ではないものもあるのではないか。事実、前掲の『平安時代の国語』(一九八七年)では、(名詞の例)が削除され、次のように書かれている。

名詞にも「かしら」「みぐし」に対する「カウベ」、「および」に対する「ユビ」、「ひとびと」に対する「トモガラ」などがあるが、概念が完全に一致するか否か不明のものも多いので、詳しくは触れないことにする。 (二七四～五頁)

これは、「慈恩伝古点」の中の「不明」を述べたものではないが、筆者は前述のようなことが、言えるのではないかと考える。

又、築島氏は、「訓点語彙と和文語彙」(『文学・語学』57号(一九七〇年)所収)、「平安時代の訓点資料に見える「和文特有語」について」(『文化言語学』(一九九二年)所収)の論文で、「漢文訓読語」が比較的初期の和文に用いられたことについて再考され、和文語が訓点資料のある種のものに用いられる例についての考察を進めておられるが、和文語を日常会話語、漢文訓読語を文

賀茂保憲女集序文の語彙と築島裕説

章語とする考えは変えておられない。また、『土左日記』の漢文訓読語は、作者の漢文訓読の素養によるものとの考えを繰り返して述べておられる。

## 六 音便形・日常的用語と賀茂保憲女集序文の語彙

そこで、本節では築島氏の最も新しい著書『訓点語彙集成』第一巻(二〇〇七年)で、述べられているところについて、賀茂保憲女集序文の語彙と関わらせて論を進める。

以下、『訓点語彙集成』第一巻訓点語彙総観の一部分を引用し、私見を述べる。

『土左日記』には撥音便と見られる例があるが僅かばかりである。『源氏物語』にはイ音便、ウ音便、撥音便の例は多く見られるが、用法が限られてをり、促音便は原則的に存しない。撥音便も「あり」「なり」が「べし」「めり」に続く場合などに限られてゐる。これに対して、訓点語彙には、種々の音便が極めて多く、用法も多岐にわたる。この点では、訓点語彙は、発音の面では、実際に近い状態を反映してゐるとも推測し得よう。この意味では和歌和文よりも「口語的」と見てよいのかも知れない。(四五頁)

傍線部の記述は、慎重な発言とも言えようが、曖昧で疑義をもたれるような言い方になっている。それは、次のような考えが基本にあるからであろう。

平安時代の和歌の言語は、和歌特有の体系、形式を持つてをり、日記や物語などの和文の言語も、洗練された美意識に基づいた表現であつて、日常語を基盤としながらも、決して生の言語そのままを反映したものではなかつた。一方、漢文訓読の言語は、漢学者、学僧などの講義、研究などに用ゐられたものであり、講師や師匠の口述の準備のための記入や、弟子や受講者が講義の聞き書きを行つて記録した言語であつたため、他の一面では、実際の発音に忠実に表記される性格もあつた。音便などが訓点資料に多く見られるのは、多分この点に原因があるものと思はれる。

(三〜四頁)

和歌・和文の言語が日常語を基盤としていながらも、漢文訓読語を漢学者、学僧の用語とする持論に立つたために、「発音(音便)の面では、「口語的」と見てよいのかも知れない。」という分かりにくい説明になつてしまつてゐる。語彙の面においても、漢学者・学僧も漢文訓読の中で日常的用語も使うこともあつたと、ゆるやかに捉えるべきではないか。次の記述は、筆者も賛同するところ(特に、傍線部)が、少なくない。

『源氏物語』などの仮名文学、特に女性の作者によつて作られた文学作品は、表現上に技巧を駆使したものであり、その中に使用する語彙は、意図的に選択され、忌避されたものが多かつたに違ひない。例へば、人体・病氣・武器・刑具などに関する単語は、非常に例が少ないが、この現象などは、その顕著な反映といふことが出来る。(中略)又、上記の単語の中でも「のみと(↓のむど)」「あかがり」、「たて」「ほこ」などは、上代奈良時代の万葉集などの文献にも出てゐる。この点から見ても、これらの単語の中には、古く奈良時代から平安時代を経て後世まで脈々と続いてゐた単語が多数占めてゐるのであり、これらの言葉が『源氏物語』に見えないのは、当時一般に使はれなくなつてゐた言葉ではなく、逆に『源氏物語』の方が、平安時代の言葉の中でも、或る意味で限られた範囲のものであつたと考へられる。(五九〜六三頁)

しかし、以下の記述は、前述したように、賛意は表し難い。

これに対して、奈良時代にはまだ現れず、平安時代になつてから始めて登場した言葉が多数ある。それ等の中にも、同様の意味を表すのに、訓点資料と仮名文学との間で対立関係にある言葉が沢山あつた。訓点資料では盛に使はれてゐた副



詞の「ひそかに」「すみやかに」「あるいは」「動詞の「まじはる」などが、『源氏物語』などの仮名文学では殆ど用ゐられず、その代りに「みそかに」とく、「あるいは」「まじらふ」などを使つてゐることが知られてゐる。

上述のやうに『源氏物語』などに用ゐられてゐた、「まさ」に「いみじく」「されど」や、「みそかに」「とく」「まじらふ」「あるいは」などの語彙は、現代語では余り使はれなくなつてをり、却つて訓点資料の「ひそかに」「すみやかに」「あるいは」「まじはる」の方が、現代語の中に生きてゐる。また、上代語の「きたる」「あに」「はなはだ」「しかれども」なども、現代に用ゐられてゐるが、これらの語彙は、平安時代には『源氏物語』などの仮名文学作品ではなく、訓点資料の中で生き延びて後世に伝つたものと考へなければならぬ。

(六四～六五頁)

右の、傍線部「却つて」以下の、「訓点資料の中で」「ひそかに」「すみやかに」「あるいは」「まじはる」等の語が、現代語にまで生き延びた」とする趣旨の記述は、理解しがたい。先にも述べたやうに、訓点資料の用語のなかにも、日常の用語が存しており、それが、貴族という一部の識字階級に止まらず、文字を知らない圧倒的多数の庶民の中で伝えられて、今日に至つていと解すべきである。

総じて、平安時代の和文作品全体を見渡すのに、文中に取入れられた訓点特有の語彙の中でも、「ごとし(ごと)」「いはむや」と「まして」は比較的例が多いが、「あに(豈)」「いづくんぞ」「あらゆる」「いはゆる」「けだし」等は例が稀である。訓点語彙の中でも、和文に取入れられ易いものと取入れられにくいもののがあつたことを感じさせる。

(六九頁)

傍線部の「ごとし(ごと)」「いはむや」が、何故に和文に比較的多く取り入れられたかは、「ごとし(ごと)」「と」「やうなり」、「いはむや」と「まして」は意味が異なるとともに、平安物語において、一はじめに述べたやうに、登場人物の会話に用いて、その役割を表示するものであつた、と考える。「いはむや」と「まして」の意味差については、【注一】の拙著で、詳述した。

二 賀茂保憲女家集序(総序の冒頭)に見られる「漢文訓読語」と「音便形」は、前述したやうに、賀茂保憲女による日常の用語を使った文学作品として素朴で洗練されていない文章と評価してよいのではなからうか。四 総序の終わりの「かしらをかたぶけ」の「かしら」は、「かうべ」という身体部分をあからさまに表現する語は女流としてさすがに使い難かつたゆえであり、このことは、賀茂保憲女以外の男性が代わつて書いたのではないことをも示唆していると考える。